

NISSAY IT REPORT



保険業界でアジャイルを成功させるために



ニッセイ情報テクノロジー株式会社

2022.08

VUCAという予測不可能な時代に… 「アジャイル」の重要性

現在は、VUCA^{*1}の時代と言われており、ビジネスや市場、組織等の変化が激しく、計画を重視したウォーターフォール型のアプローチでは、市場の変化に追いついていくことが困難になってきています。

このような予測不可能な時代において、市場で淘汰されず国内外での競争力を高めていくために、「アジャイル」の重要性が国内でも認識され始めています。

当レポートでは、アジャイルの概要や導入時のポイント、アジャイルと親和性の高い「ノーコードツール」について、NISSAY ITの導入事例も交えながら解説します。

既にアジャイルを導入済みで苦労された経験のある方、アジャイルの必要性は分かりながらも検討過程におられる方は、3ページの『アジャイル導入にあたってのポイント』以降からお読みください。

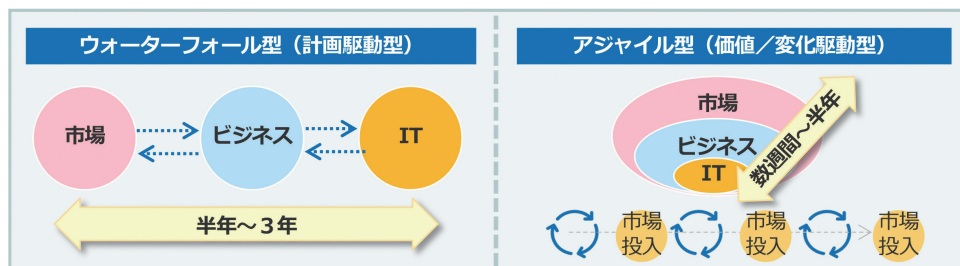


*1 Volatility：変動性， Uncertainty：不確実性， Complexity：複雑性， Ambiguity：曖昧性 の頭文字

アジャイル / ノーコードツールについて

アジャイルとは

「アジャイル」は、市場が求める“価値の最大化”に重点を置き、“素早く市場に投入”して“フィードバック・ループを回す”アプローチです。市場の状況に合わせて“変化”を受容し、俊敏・柔軟に対応していくことが求められます。



なお現在は、「SoE^{*2}」という顧客接点部分のシステム開発では「アジャイル」、「SoR^{*3}」という契約管理等の基幹系システム開発では「ウォーターフォール」というイメージが強いですが、開発の目的（Why）に合わせて手法を選んでいくことが重要です。

SoR領域でも未知の新技术を使った開発やSoE領域と親和性の高い開発等、部分的にアジャイルを試行的に適用していくケースが今後必要になってくると考えます。

*2 SoE：System of Engagementの略

*3 SoR：System of Recordの略

【ウォーターフォール型とアジャイル型の「Why / How / What」の主な違い】

ウォーターフォール型（計画駆動型）		アジャイル型（価値／変化駆動型）
・ QCD^{*4}の遵守 ・ スコープで定められたシステムの完成	Why 何のために？	・ ビジネスやソフトウェア開発の不確実性への適用 ・ ビジネス価値の最大化
・ 厳密な要件定義 ・ フェーズを分けて「プロセス」重視で全て完成する	How どうやって？	・ 早く（少しずつ）形にすることを繰り返す ・ 優先度を付けて価値があるものだけ
・ 要件フェーズ、設計フェーズ、レビューと承認、スcheduling、進捗会議等	What 何をする？	・ スクラム、カンバン等

*4 Quality：品質、Cost：費用、Delivery：納期 の頭文字

アジャイルと親和性の高い「ノーコードツール」とは

「ノーコードツール（ローコードツール）」とは、プログラミングを最小限に抑えてシステム開発が可能なツールです。Webアプリケーションを迅速に開発でき、高速なTry & Errorでの開発が可能のため、変化する外部環境や顧客ニーズにもスピーディーに対応でき、アジャイル開発との親和性が高いとされ注目を集めています。

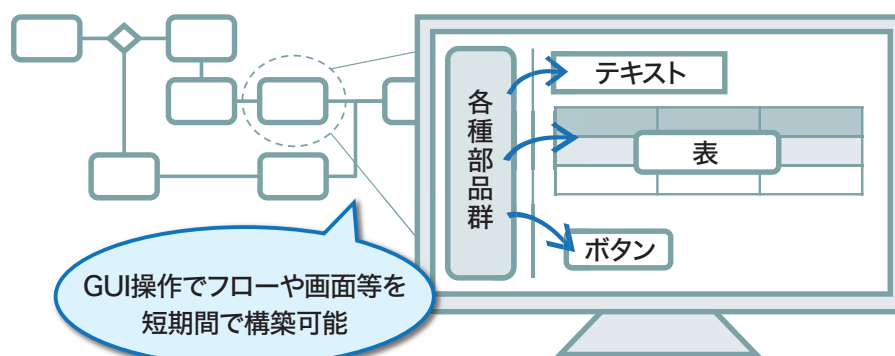
同ツールは、SaaS^{*5}やPaaS^{*6}として開発環境が提供されている製品が多く、インフラ構築不要ですぐに開発を始めることができます。

また、画面を構成するコンポーネント（部品）が提供されており、Drag & Drop等のGUI操作で部品を組み合わせることで実装が可能です。

製品にも依りますが、業界に特化したモジュールやテンプレート、マーケットプレースの提供、API^{*7}による外部サービスとの連携機能等、開発効率や拡張性を高める豊富な機能が備わっています。

*5 SaaS：Software as a Serviceの略 *6 PaaS：Platform as a Serviceの略

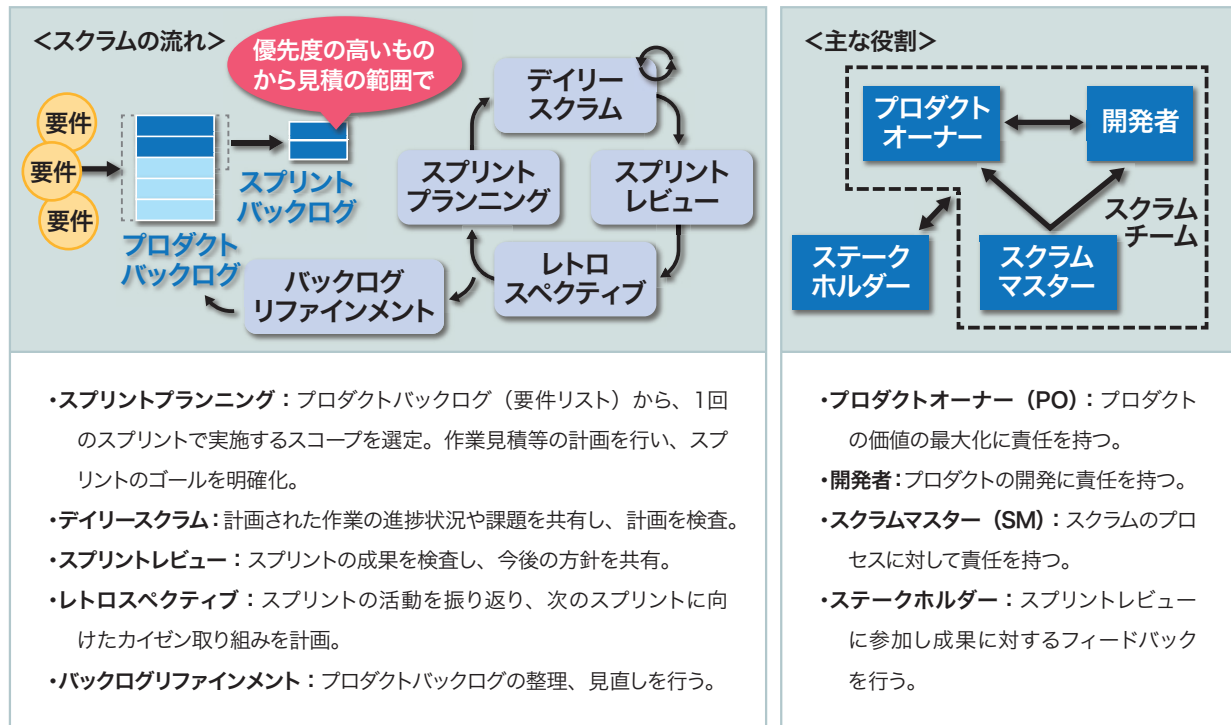
*7 API：Application Programming Interfaceの略



アジャイルの代表的な手法「スクラム開発」とは

アジャイル開発には様々な手法がありますが、中でも代表的なのは「スクラム開発」です。1ヶ月以内の事前に決められた期間である「スプリント」という単位で、計画・開発・振り返りという流れを繰り返し、短期間で反復的に開発を進めていきます。

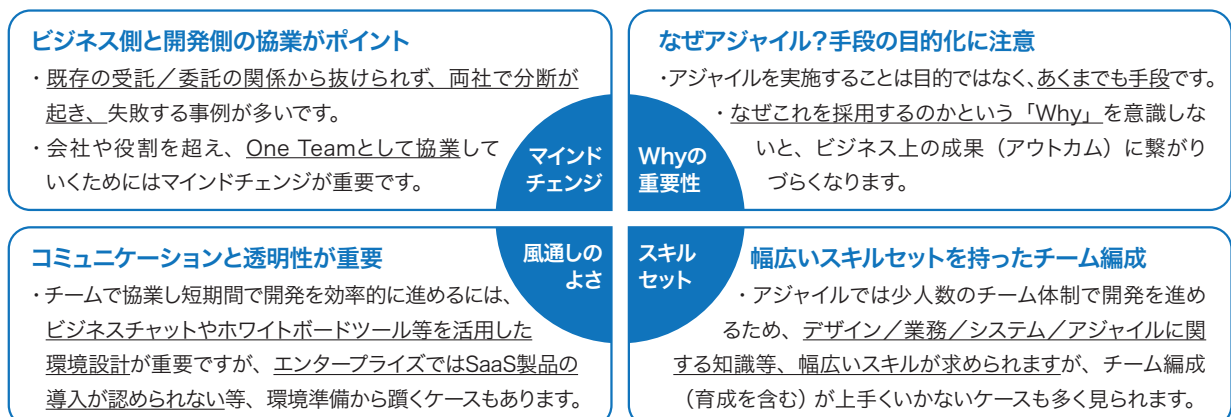
スクラムチームは、「プロダクトオーナー（PO）」「開発者」「スクラムマスター（SM）」の3つの役割で構成され、10人以下の少人数のチーム体制を組むことが多いです。



アジャイル導入にあたってのポイント

上記のとおり、アジャイルのプロセスや役割等については一定ガイド化されていますが、実践しようとなると意外に難しく、教科書通りに進まない面もあります。

アジャイルの有効性を最大化するために、以下の4つのポイントを意識して導入を進めるとよいでしょう。



事例のご紹介

NISSAY ITでは、保険業界のお客様を中心にエンタープライズでのアジャイル開発を成功させてきました。事例を通してどのような点を工夫したのかポイントを解説します。

事例①：アジャイル×ノーコードで新商品のフロント画面の実装を約5ヶ月で実現

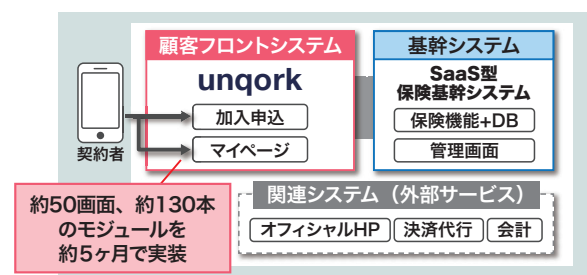
某生命保険会社様における少額短期保険事業の起ち上げにあたり、その顧客フロントシステムを「Unqork^{*8}」というノーコードツールを使って新規構築しました。



- ・いきなり実装に飛びつかず、まずはアーキテクチャ方針等の上流を固める
- ・テスト自動化により、開発効率や継続的に品質を向上できるような初期から環境設定

開発を始める前に、ビジネスで達成したい目標を明らかにし、ツールの機能・制約を踏まえつつ、製品の選定やアーキテクチャの全体方針を定める等、上流での検討をしっかりと固めることは従来の開発と変わらず重要なことです。

また、プロジェクト初期から、テストを自動化できる環境を設定しておくことで、開発効率を更に高め、継続的な品質向上を実現できるようにしています。



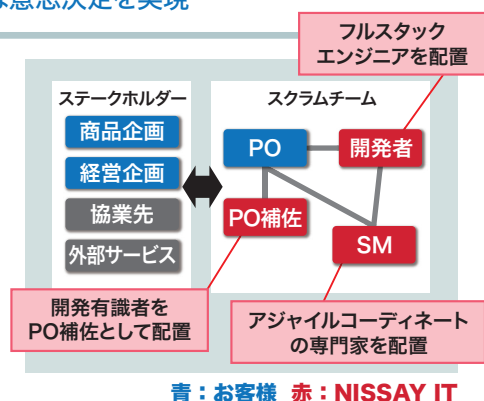
- ・スクラム開発手法を用い、ビジネス側と開発側による機動的なチームを構成
- ・ビジネス側の意思決定者がスクラムに参画し、迅速な意思決定を実現

お客様（ビジネス側）とNISSAY IT（開発側）によるスクラムチームを組み、両社で協業してアジャイル開発を行いました。

プロダクトオーナー（PO）にはビジネス側の部長層に参画いただくとともに、非常に役割が多いとされるPOの補佐役を配置することで、迅速な意思決定を実現しました。

事業会社の設立という高難度の案件でしたが、必達のスコープを最初に定めつつ、細部のシステム化範囲を調整しながら細かくコントロールしていました。3ヶ月単位／月単位／週単位／日単位での進捗や課題管理を透明性高く行うことで、ビジネス側と開発側が意識を合わせ、迅速に対応することができました。

また開発側の体制では、幅広いスキルセットを持つフルスタックエンジニアを数名配置しました。アプリケーション開発に留まらず、アプリケーション全体のアーキテクチャをデザインでき、更に開発環境やテスト自動化ツールといったインフラのスキルを持ち合わせた人材を登用したことも、短期間での初期構築を成功に収めた要因の1つだと感じています。



^{*8} 「Unqork」及びそのロゴは、Unqork Inc.の米国及びその他の国における登録商標です。

事例②：アジャイルコーチとして保険会社様を伴走型で支援

クラウドプラットフォーム上に構築したWeb申込のシステム改善プロジェクトにおいて、開発の機動性をあげるため、アジャイルを初めて導入されるお客様をアジャイルコーチとして支援しました。

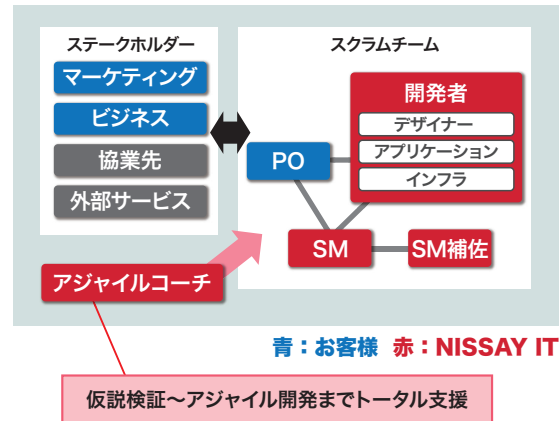
Point



・スクラム開発を進める上でのフレームワークや環境整備、マインド醸成等をサポート

本事例では、スクラムチームにおけるスクラムマスターや開発者として参画する他、アジャイル開発を初めて導入されるお客様であったため、アジャイルコーチとしても参画し、スクラム運営が軌道に乗るまでを支援しました。

スクラム開発手法における各プラクティスの説明、実施局面での指導、初期のスクラムイベントのファシリテート、そして定期的な勉強会の開催等、スクラムチームが自律して運営を行えるよう指導・支援を行い、アジャイル開発の理解・定着を図りました。



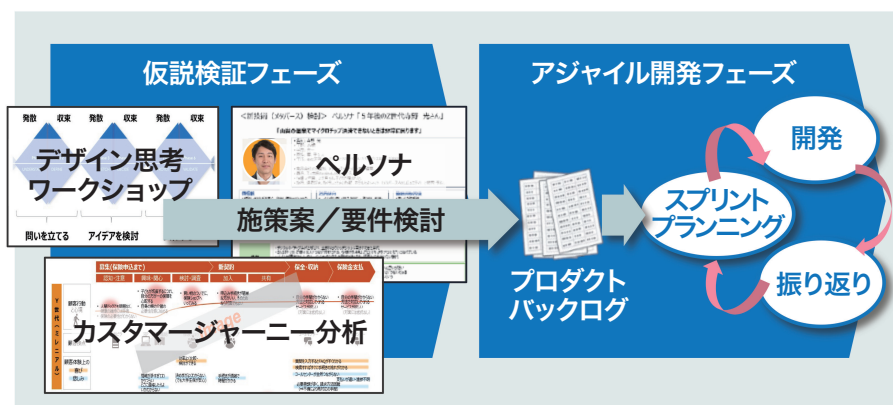
Point



・デザイン思考による仮説検証型アプローチで、お客様と一緒に実践／体験型で要件検討

プロダクトの価値の最大化に責任を持つプロダクトオーナーを支援するため、仮説検証型アプローチを採用入れ、お客様と伴走する形で要件検討を行いました。

答えがない未知の世界で課題を見出し、施策へ繋げていくには、ユーザー視点で解決すべき課題を問い、仮説検証型で素早く構築・計測・学習を回していくことがよいとされています。本事例ではカスタマージャーニー分析等のデザイン思考を採り入れたワークショップを開催し、お客様と一緒に施策や要件を検討しながら、アウトカム（ビジネス上の成果）にこだわったプロジェクト運営を行っています。



執筆者のご紹介

NISSAY ITでは、2022年4月よりInsurTech推進室を新設しております。

当室ではアジャイルの展開や仮説検証型での新規ビジネス／ソリューションの検討を進めています。



小泉 岳人
InsurTech推進室
室長

アジャイルはとりあえず実施してみるといったような印象がありましたが、エンタープライズで成功させるためには『こまめに計画を繰り返す』『プロダクトのビジョンを共有する』『適したアーキテクチャを選ぶ』等、予想以上に計画／設計作業は重要でした。過去の大規模プロジェクトで培ったマネジメントやアプリケーション設計のスキルに加えて、アジャイルの知識／経験も活用することで、お客様のビジネス成功／組織変革のお手伝いができればと思っています。

略歴

生命保険領域の開発を10年以上経験。新会社設立や新チャネル開発、アジャイル導入等のプロジェクト推進を実施。近年では新規ビジネスの企画・開発を実施。



青柳 大輔
InsurTech推進室
スペシャリスト

お客様とのアジャイル開発において、ビジネス側のメンバとシステム側のメンバとがフラットな関係となり、同じゴールを目指して進めるかは、成功に向けて重要な要素だと感じています。お客様も含めたOne Teamになることは決して簡単なことではありませんが、One Teamなスクラムは生産性が高く、そしてなにより楽しいです。自身もスクラムマスターとして、これからもOne Teamなスクラムチームを多く生み出していきたいと思っています。

略歴

生命保険領域の契約管理システム開発を多数経験後、顧客フロントの開発に従事。近年ではスクラムマスターとして社内外の複数プロジェクトに携わり、アジャイル開発を推進。

問合せ先 保険インフラ事業部 InsurTech推進室 TEL：03-5714-5827 E-mail：info@nissay-it.co.jp



ニッセイ情報テクノロジー株式会社

〒144-8721 東京都大田区蒲田5丁目3番1号 ニッセイアロマスクエア

<https://www.nissay-it.co.jp>

※本文中に掲載されている商品名およびサービス名は各社の商標または登録商標です。

All Rights reserved, Copyright©2022 Nissay Information Technology Co., Ltd.

(本誌記事の無断転載・コピーを禁じます)
2022年8月発行 NIT2022-045(保イ001)07



ニッセイ情報テクノロジー株式会社